

第3回 「知(チ)について」 (2026.02.28 開催)

<概要をまとめる意義>

以下、今回の哲学カフェの内容について概要をまとめる。

これは議事録ではない。迷ったら何度もここに立ち返り、その内容を容赦なく批判し、議論しなおし、更なる”問い”の根源へ一歩でも近づくための手掛かりとしてほしい。

<知(チ)について>

今回の議論では「知」という語が指す内容の多様性を出発点とした。日常生活において、私たちは記憶量や整然とした理解のことを「知識」と呼び、会話や人格に滲み出る余韻を「知性」と呼び、経験や実践を通して磨き抜かれた手法を「知恵」と呼ぶ。このように、同じ「知」という語でも何と結びつくかによってそれぞれが異なった状態を示している。この点から見えてきたのは、「知」とはあらかじめ固定された絶対的な実体ではなく、対象物や目的との関係の中で立ち上がるものではないか、という視点である。当然、洗練されていく過程はその地域や国の言語によるため、対象物との関係をうまく言い表せる言葉もあれば、それを違う言語に翻訳する際には全く違う言い回しになってしまうことも起こる。例えば、日本では雨の状態を表す語彙が多く(例:霧雨,小雨,夕立,春雨,五月雨,時雨,氷雨)これらの言葉を心象まで含めて正確に他言語で伝えるのは容易ではない。翻訳という作業から見ても、やはり「知」は言語やその場所で育まれた文化との関係性の中で立ち上がっていくことが示唆される。

近年、人工知能の進化により、すでに蓄積された「知」へのアクセスは飛躍的に容易になった。膨大な記憶量と体系化された知識,知恵を使った問題解決能力に関して、人間が優位に立ち続けることは難しいだろう。とすれば人間に残された仕事とは、既出の「知」と対象物の関係性を絶えず更新し続けること、すなわち”発想を転回させ続ける力”にあるのではないか。

<“知(チ)”を読み解くキーワード>

- ・ 知識、知性、知恵、知覚
- ・ 身体経験から出発できない「知」への対応(原子,電子,)
- ・ 理解できないものへの対応(神,宇宙)
- ・ 知の反対は何か 無?
- ・ 知と対象の関係は”言葉”に規定される
- ・ 人工知能の「知」と人間の「知」の違い

これらのキーワードから、新たな”問い“へ変換した。

<新たな問い>

- ・ 「知」の凝固化を防ぎ、いきいきと躍動する「知」の在り方は?
- ・ 「知」の最適状態とはストック型?それともフロー型?

<問いに囚われず、キーワードとして残すべきと考えた内容>

- ・ 知は蓄積されていくもの
- ・ 知が広がる一方で未知もまた広がり続ける
- ・ 知を過大評価しない_(つまり、身体感覚や直感を過小評価しない)